

華麗オルガヌムとメリスマオルガヌム——その作曲原理及び理論書との関係

平井 真希子

12 世紀に書かれたアキテーヌのポリフォニーは、テノルの 1 音符に対してオルガヌム声部に数個の音符を対応させる「華麗オルガヌム」を歴史上初めて用いている。また、やや後に原形が作られた『オルガヌム大全』の多数の曲では、テノルの 1 音を非常に長く伸ばした上に長大なメリスマが展開する形の「メリスマオルガヌム」が各曲の大半を占めている。同時代の理論書にはこれらのメリスマに関する記述は少なく、実際に残された楽譜と音楽理論との関係は十分解明されていない。本論文では一見即興的に思えるこれらのオルガヌムを分析し、その作曲原理及び理論書との関係を考察した。

アキテーヌのポリフォニーと『オルガヌム大全』のメリスマの中には、頻繁に登場する動機がいくつか認められる。これらは両者のレパートリーに共通であるが、前者では曲によって繰り返し使われる動機の種類が大きく異なり、曲ごとの個性の違いが目立つ傾向があった。また、アキテーヌのポリフォニーでは、オルガヌムの数音符の中に対応するテノルと協和音程を形成し骨格となる音が含まれ、それを基礎として考えた声部進行は大半の場合反行になっているが、一部に同じ協和音程の平行が続く部分が見られた。古い時代のオルガヌム理論は 4 度・5 度の平行唱が主体だが、12 世紀初めには反行を主体とする音程進行理論が登場することと対応している可能性も考えられる。一方、『オルガヌム大全』は、特定の装飾音型の部分を除くと、1 つのテノル音に対して使われているオルガヌム声部の音はほぼ 4 度の狭い範囲に集中していることが多く、すなわち 1 つのテノル音と 1 つのテトラコード内で動くオルガヌム声部の組合せの連続という構造になっている。この現象は、当時の理論書に見られる音程進行理論では説明できず、その意義についてはさらに研究が必要である。